

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第九回）

ふるさと

「故郷（明日香）の歌」

せこ ふるへ さと

我が背子が 古家の里の

あすか ちどり

明日香には 千鳥鳴くな

つま

り 妻待ちかねて

作者・長屋王 ながやのおうきみ 卷三―268

・右は、今案かむがふるに、明日香より藤原の宮に遷うつるし
後に、この歌を作るか。

（解説）あなたが引越して行き、古家だけ残っている明日香の里では、しきりに千鳥の鳴く声がします。きっと妻を待ちわびて悲しく鳴いているのでしよう。

(1) この歌の題詞には「長屋王ながやのおほきみの故郷ふるさとの歌一首」とある。また、左注に「右は今案かむがふるに、明日香より藤原の宮に遷る後に、この歌を作るか」とある。それで題詞の「故郷の歌」は「故郷で作った歌」という意味にとれ。このことから長屋王が持統八年（六九四）の藤原遷都後、故郷である明日香の里を訪れ今は旧都の建物が壊され宮中に仕える人「大宮人」達も藤原の宮に移り、さびれてしまった趣となった里の様子を作った歌であろう。

(2) この歌にある「わが背子」はここでは男性が親しい男性を呼ぶことの意であり。長屋王（天武天皇の孫）が藤原の宮に移り住んだ旧友のことを偲びその人宛てに送った歌であるとの説がある。

（参考文献）

・新潮日本古典集成、・明日香村史等



(写生地) 明日香村集落南の田園地帯に1400年余り前に造立され都が遷っても同じ場所で現存する日本最古の仏像とされる飛鳥大仏(釈迦如来像)が鎮座する飛鳥寺(現安居院)と集落を元飛鳥寺西門跡地から描く。(杏花)